

# ミラノ啓蒙主義に見られる 家族改革モデル

ヴェッリ兄弟とベッカリーアの場合

---

川井繁巳 博士課程後期 3 年

## I 序論

18世紀に起こった啓蒙主義は、当時の社会のあらゆる分野に大きな影響を与えたが、家族形態に関しても、その構造にラディカルな変化をもたらしたと考えられている。<sup>(1)</sup> 啓蒙主義以前の家と家族は、一つの保護共同体であり、かつまた生活共同体でもあって、そこでは労働と生活が互いに分離されてはいなかったのである。それに対して、啓蒙主義は伝統的な連帯と義務づけにたいして、理性こそ人間の規範たるべきこと、人間の自己決定の重要なことを主張し、家庭生活こそ自然な生活秩序の実現されるべき場であると説くことによって、公私の別を無理にでも推し進め、その際、家庭生活に初めて純粋に私的な性格を与えたのである。これによって、新しい「市民的」な家族形態、つまり、情緒を基調とする両親と子供の共同体である「核家族」の成立が助長されることになったのである。ただ、当然のことながら、啓蒙主義だけがこうした家族形態に構造上の変化をもたらしたわけではない。家族形態の移行の問題に関しては、他に、市場経済と近代的な国家制度が定着するのと並行して現れた、家と生業、住まいと仕事場の分離の過程の進行とか、階級社会とは無縁の場所に、美德と理性にもとづく生活秩序を大いなる自信をもって宣伝した、新しい社会編成、新しい市民層（官吏、牧師、教師、医師）が定着していったこと等が、前提条件として挙げられている。<sup>(2)</sup>

また、啓蒙主義は、成熟の一段階としての青年時代に対しても、新しい考え方を提起したと考えられている。それは、青年が、成長途上にある未成年であり、人間形成を通じて自立した人格へと発達していくべき者であるという理解である。これもまた、啓蒙主義とその教育理念の影響の他に、脆弱な旧世界に対して、新しい力強い生命感情の台頭が印象づけられるのに伴い、特に市民階級のあいだに、古い青年の概念とは無関係な新しい青年の理解が生まれてきたためとされている。とにかくこれによって、青年は本来古いものを継承するのではなく、新しいものを創造し、未来に眼差しを向けるべきであるという主張がなされ始めたのである。<sup>(3)</sup>

こうした状況は、18世紀半ばのミラノに関しても当てはまるように思われる。ベッカリーア（Cesare Beccaria, 1738—94）や、ヴェッリ兄弟といっ

たミラノの啓蒙主義において指導的な立場をとっていた人物たちも、家族形態の構造変化とか、自分たち青年が社会において果たすべき使命とかいったことについて何らかの関心を寄せていたようである。<sup>(4)</sup> そこで本稿では、主に文献資料を手がかりにして、思想的な潮流、特に彼らの家父長に対する態度と、青年に対する認識に焦点を当てて分析、考察を進めていくつもりである。

## Ⅱ 家父長権に対する理解とその現実

具体的な検討に入る前に、まず、当時の家父長権に対する法制史的な理解に関して簡単に説明を加えておきたい。<sup>(5)</sup> ただ、様々な機能を含む家父長権の中で、今回は特に父親と子供の関係に主眼をおいて論を進めていくつもりである。まず、1750年代には、家父長権を「通常」と「特別」なものに二分し、前者を、親の子供に対する教育、養育、保護義務から、逆に子供に服従を強いるという、自然法から派生した権力、後者を、前者と結びついて子供の人格、財産に関する父親の支配権を認めた、ローマ法から導きだした権利という解釈がなされていた。<sup>(6)</sup> それが1770年代になると、家父長権を自然法のみから派生させるという考え方も生じてきた。つまり、子供は生来自己保存権を所有しているものの、誕生直後はその権利を行使するだけの能力がない。そこで、神は、特に両親に子供の教育、養育義務を与え、更に、こうした両親の教育義務から、子供の幸福のために、その行動を指導、修正させるためのいくばくかの権力が与えられ、逆に子は両親を敬い、従うべし、という考え方である。また、こうした性格を持った家父長権は、子供が成長して自立し、自己保存能力を十分に行使できるようになった時点で消滅するものとされている。<sup>(7)</sup> このように多少の相違はあるものの、基本的には、自然が親に与えた機能を十分な形で行使させるために、家父長権を積極的に評価しようとする態度が一般的だったようである。

次に、こうした環境の中で、ミラノの啓蒙主義の担い手となった若者が、

父親とどのような関係を保っていたかについて簡単に触れておこうと思う。

ピエトロ・ヴェッリ (Pietro Verri, 1728—97) は、権威的で冷徹な母親と、子供の意志に関係なく自分の思い通りの人生を歩ませようとする父親に対して、幼い頃から反抗心を抱いていた。そして、ピエトロがある貴族の人妻と交際していることが発覚した時、陰悪だった親子関係が表面化した。交際を絶つようにという命令を聞き入れない息子に腹を立てた父は、この件に関する政府の介入とピエトロの投獄を要求したのである。結局は、当時の司法長官が仲裁に当たり、双方の名誉を守るという方向で解決を見たが、これが、ピエトロの父親に関する感情に決定的な影響を与えたようである。<sup>(8)</sup>

それから約10年後の1760年に、ベッカリーアも、最初の夫人となるテレサ・ブラスコ (Teresa Blasco) との結婚問題を機に、父親と激しく対立することになる。<sup>(9)</sup> ベッカリーアの父親は両家の釣り合いが取れていないとして、この結婚に反対<sup>(10)</sup> し、政府も父親の側に立った。こうした状況の中でベッカリーアは追い込まれ、その年の秋には不法な結婚を企てた。だが、家族、周囲、政府の圧力に屈する形で、いったんは結婚を諦めた。

情熱が和らぎ、このような結婚がもたらす痛ましい結果を真面目に考えてみると、そうした結果に陥るのは、私よりもむしろ貴女なのです。(中略)冷静になってみると、誠に遺憾ながら、婚姻関係を結ぶのは難しいという印象が拭えません。この婚姻によって、双方とも確実に無駄な後悔というものを経験することになるのです。<sup>(11)</sup>

が、2月になると発言を撤回した。

イエス・キリストの名にかけて、お願いいたします。これ以上この婚姻の成就を妨害し、私の意志や分別をかき乱すような真似はどうかさないで下さい。(中略)私は、自分の心を乱すためにできることすべて(結婚を諦めること)をやってきました。けれど、現在、これ以上心変わりするようなことは絶対にありません。家を追われても、わずかな扶養

料に苦しむことになるうとも、甘んじて受けましょう。<sup>(12)</sup>

政府に訴え出た父親によって、自宅拘禁の処分を受けていた身でありながらも、最終的には己の意志を通したのである。元老院の評議委員の口添えによって、19日になってようやく自宅拘禁が解かれ、結婚することができるようになった。

上で紹介した二人の例の中で強調すべき箇所は、まず第一に、父親によってとられた、「投獄」とか「自宅拘禁」といった処置である。ピエトロ・ヴェッリの場合は未遂に終わったけれども、しばしば何らかの公権力の介入を伴った、父親の要請によるある種の懲罰措置が、不埒な子弟に対して講じられるという行動パターンは、当時、かなり一般化していたらしく、こうした若者は、通常、矯正施設、或いは監視所といったところに送られるが、効果が不十分とみなされると、刑務所とか感化院といったところに移されていたようである。<sup>(13)</sup>

次に注目したい点は、こうした子弟がおかれていた経済状況である。先に引用したベッカリーアの手紙が示唆しているように、彼らは経済的には完全に父親に依存せざるを得ない状況にあったのである。事実、ベッカリーアの父親は、彼が自由の身になった後、与えるべき扶養料の割り当て額を決定すべく政府に要請しており、結果、ベッカリーアは、結婚はできたものの経済的にはかなり切迫した状態に陥ることになったのである。ヴェッリ兄弟も、往復書簡の中で幾度となく、父親から独立した経済というものに対する期待を表明しているのである。<sup>(14)</sup>

以上述べてきたように、ミラノにおける啓蒙主義の指導者たちが家父長権に対して抱いていた不満は、反抗的な行動をとった際に受ける拘禁措置と、経済的な意味における家父長への従属を余儀なくされたという二点に整理することができ、両者とも何らかの公権力の介入を伴っていたという特徴を指摘することができるように思われる。ただ、ここで注意しておきたいことは、こうして行使された公権力が、ミラノ公国という範疇の中のものであったということである。<sup>(15)</sup> というのも、こうした家父長権からの独立を志向してとられた解決策というのが、当時ロンバルディアを所領

としていたオーストリアの高級官僚として登用される道を切り拓く、というものだったからである。彼らにとっては、より高い名誉を得るという野心だけでなく、父親からの経済的独立という目的も、主要な動機であつたろうことは容易に想像がつく。一方、ミラノ公国の自治権をある程度承認しながら、他方、その自治権の漸次的な侵蝕への道を模索していたハプスブルク家側にとっても、元老院に代表される強力な地方行政制度に対抗する勢力がミラノ内部に育ちつつあるという事実は、歓迎すべきことであつたに違いない。こういった事情の中で、共通の敵をもったオーストリア政府とミラノの若い知的エリート達は、改革運動実施のために手を結んだのである。<sup>(16)</sup>

話が多少横道にそれたが、要するに、ミラノにおいては、家父長権への不満やそこからの経済的な自立といった個人的な問題が、家父長権の保持者であつた父親の世代が同時に地方行政組織の要職を占めていたという事情から、政治的な問題へと飛躍するための重要な要因となつたと考えることができそうである。いささか詭弁ではあるが、「古き束縛からの解放」をスローガンとしたミラノの啓蒙主義は、家父長権への疑問から始まつたとでも言えそうである。

### Ⅲ「犯罪と刑罰」にみられる家族形態の改革モデル

こうして、ピエトロ・ヴェッリを中心に寄り集まつた、ベッカリーアを加えたミラノの若い知的エリート達は、1762年頃に「拳の会 (Accademia dei pugni)」を結成し、主としてイギリス、フランスの啓蒙思想を積極的に取り入れながら、雑誌「カッフェ (Il Caffè, 1764-65)」を刊行して新しい思想の伝播、普及に努める一方、著作活動を通じて当時の社会制度の改革、改善を主張していた。<sup>(17)</sup> こうした環境の中から生まれた重要な著作の一つが、ベッカリーアの「犯罪と刑罰 (Dei delitti e delle pene, 1764)」である。ここでは、その中の「家族の精神について (Dello spirito di famiglia)」と題された章を取り上げて、極めて単純化されたものではあるけれども、そ

の中で論じられている家族形態モデルについて、考察を進めていくつもりである。

ただし、前置きが長くなって論理に混乱をもたらす恐れがあるものの、ここで、複雑な問題をはらんでいるこの著作の文献学的な問題に関してあらかじめ説明を加えておく必要があるだろう。この「犯罪と刑罰」実は今世紀にいたるまで、42章構成のものと47章構成のものと2種類が出回るとい状態が続いていた、文献学的にはかなり厄介な問題をもつ作品なのである。<sup>(18)</sup> ちなみに、1984年に刊行されたベッカリーア全集の第一巻「犯罪と刑罰」においては、1766年に刊行された47章構成である第5版を土台にしたものが、ベッカリーアが自ら手を下した最終稿として採用されている。<sup>(19)</sup>

「犯罪と刑罰」の著者がベッカリーア自身であることは、まず、紛れもない事実である。ただ、この作品が先に触れたように「拳の会」という環境の中から生まれたということや、ベッカリーアが書いて、それをピエトロ・ヴェッリが添削するといったプロセスを通じて執筆が行われていたという証言<sup>(20)</sup>から、ベッカリーア独自の思想をどの範囲にまで限定するかといった問題が、当時から話題になっていたらしい。更には、1766年に起こったヴェッリとベッカリーアの決裂が、事態をいっそう複雑なものにした。<sup>(21)</sup>

更に、現存するベッカリーアの自筆原稿<sup>(22)</sup>と、初版本を初めとする出版された「犯罪と刑罰」とを比較すると、かなりの数に上る異同箇所が存在することが明らかとなっている。この原因は、印刷所に送るに当たって、訂正箇所や欄外書き込み等のために全体としてかなり読み難くなっている第一稿の清書の作業を、ピエトロ・ヴェッリが代行し、その際、自分の判断で適宜、訂正、削除、増補等の作業を行ったため、という解釈がなされている。<sup>(23)</sup>このため、ベッカリーアのオリジナルとヴェッリの思想との相違が矛盾点となって現れる、という結果が生じたのである。「家族の精神について」と題された章は、こういった矛盾点をはらんだ顕著な例の一つとして、先に触れた「全集」の注釈の中で取り上げられているといった事情があったのである。

前置きが長くなってしまったが、本稿においても、こうした研究結果に従い、ベッカリーアのオリジナルとピエトロ・ヴェッリの増補箇所に分割してこの章の分析を進めていくことにする。

まず、ベッカリーアのオリジナルから整理<sup>(24)</sup>しておこう。「家族の精神について」という章は、追放の宣告を受けた家父長の財産が没収される際、罪人のみならずその家族までもが彼の犯した罪による汚名をきせられ、悲惨な目にあうという不合理を告発した「追放と財産没収 (Bando e confische)」という章を受けて、こうした不正が、社会を人間同士の結合体ではなく、家族同士の結合体と見なされていることから生じるという見解を示し、その分析を行っている。

10万の人間がいて2万の家族があるとする、各家族は、それを代表し治める当主を含んだ5人家族となる。この連携が家族本位であったとすれば、2万の自由な人間と8万の奴隷がいることになるし、この連携が人本位のものであるならば、全ての人間が自由となり、奴隷は存在しなくなる。<sup>(25)</sup>

極めて単純化された図式ではあるが、ここから次のように論理を展開させている。まず、家族本位の結合体の場合には、共和制であっても、内部には2万の小君主がいて、子供や妻は家父長が存命中はその支配下にとどまらなければならない、服従と畏れを教え、幸福を家父長のもとにだけもたらし、常に自己犠牲を強いるという側面をもった家族の精神に基づいた道徳というものが存在するとしている。一方、人本位の結合体の場合には、共和制的な精神が公共の場所だけではなく、家庭内部にまで浸透し、家父長への従属関係も命令ではなく契約によってなされるので、ある程度成長した子供は、自由な市民となり、家父長の意志ではなく、彼が社会で培ってきた利点を生かすために従属するのであり、そうした親子の関係は、相互扶助的な性格をもつものであると規定している。ベッカリーアによれば、勇気と自由を教え、幸福を全ての人に分け与え、法を犯さない限り自己の利益を追求して良いと教えるのは、こうした人本位の結合から生まれた公



共的な道徳であるとされている。更に、社会的な人間の間には、一方では自分を外、つまり社会に結びつけようとする感情と、自分を内、つまり家族に結びつけようとする感情という、互いに相対する関係にあり、徹底した専制主義のもとでは、この第二の感情が優位を占める傾向にある、と考えた。<sup>(26)</sup> はっきりと書かれているわけではないが、社会を個人の結合体と考える必要があり、そのためには、人の気持ちが内に向かいがちになる行き過ぎた専制主義は避けるべきであるというのが、この章におけるベッカリーアの主張であると考えられている。<sup>(27)</sup>

以上、大まかな論理の展開を紹介した上で、次に、この章に見られるベッカリーアの家族観の特徴について指摘しておきたい。まず、共和制的な精神が「広場や国民の集会」のみならず、「人々の幸せや惨めさの大部分がある家の壁の中」にまで浸透するという部分である。なにげない簡単な記述ではあるものの、この中に、家庭というものが外の世界から分離され、情緒的な性格が与えられているといった傾向が表れ始めているように感じられる。次に指摘したいのは、成長した子供の家父長への従属が後者の意志に従うためではなく、前者自らの意志によってなされるという部分である。前節において指摘した、成長した子供に対する家父長権の消滅が、これを先取りする形で表明されている点が非常に興味深い。更に、年少時における家父長への強制的な従属関係を、「自然の従属、つまり、(子供の)無力さとか、教育、保護の必要からくる従属」と評し、自然法に基づく家父長権を容認しようとする態度が伺える。最後に、親子の間においても、契約によって結ばれた平等かつ相互扶助的な関係が一つの理想像として想定されている点を挙げておく。

次に、ピエトロ・ヴェッリの手による増補箇所についての分析に移りたい。<sup>(28)</sup> 「家族の精神」による弊害という点に関していえば、彼の手による加筆部分はベッカリーアの記述を受け、それを強調するという役割にとどまっている。ただ、家族の精神のもとでできた法律や習慣が「家長の立場に立ったものである」とか、「家族の精神とは少人数(家長)の個人的な事柄に限定された精神」とははっきり定義している点、「家族の利益」という根拠の無いイデオロギーへの犠牲、更には親から受けた恩恵に対する感謝という絆

が、「法律(家族の精神に基づいた)によって規定された、誤解された服従によって打ち碎かれるのである」といった記述から判断すると、当時彼が経験した家父長へ絶対的な服従に対する不満が、社会体制への批判とかなり密接な繋がりをもって、改革を通じた旧体制の打破という主張が、ベッカリーアのものに比べてかなり強い調子を帯びていることが分かる。

更に、ヴェッリの加筆部分には、ベッカリーアのオリジナルには見られなかった見解が加えられている。

若く旺盛な時代を従い畏れることに馴れきってしまった子供は、(中略)旺盛な変化に代わってそれがもたらす結果への絶望が支配する年輩になった時に、徳に対置された不徳の障害に対して、一体どのようにして抵抗するのであろうか。<sup>(29)</sup>

「家族の精神」が青年期の人間にもたらす弊害を指摘したこの部分から、同時に、人生における青年期の重要性や、青年に対して想定されたある種特別な価値観というものも表明されているように思われる。

最後に、蛇足になるがベッカリーアとヴェッリとの見解の相違が表れている箇所を指摘しておく。強すぎる専制主義は希望しないというベッカリーアに対して、大きすぎる共和国は「それを分割して再統合する」必要があり、「才能あるスラのような勇気ある独裁者」が適任であるというのがヴェッリの意見である。<sup>(30)</sup> 啓蒙絶対主義に関する見解についてあれこれと論じるには、余りにもテーマが大き過ぎるし危険でもあるので、ここではこうした事実だけを指摘するだけにしておく。ただ、ベッカリーアがヴェッリの意見に同意を示さなかった可能性を否定し、ベッカリーアの自筆原稿の中で欠落している箇所のうち、ベッカリーアの手による部分がある可能性を示唆しながらも、問題となっている部分はヴェッリのものであるという見解が示されている。<sup>(31)</sup>

以上、家族形態モデルと形容するにはあまりにも短く単純な記述ではあったが、分析の結果をまとめると、人間の自己決定の重要性、親子関係にも自由で平等かつ相互扶助的な契約関係を理想としている点、更には人

生における青年期の重要性など、啓蒙主義の強い影響を指摘することができるとされる。そして、家族形態に関して何らかの変化を希望し、それを準備しようとする態度が、家庭の情緒的な側面の認識を加えたこうした態度となって、彼らの思想の中に表明されたのではないだろうか。

#### IV「青年期」に関する認識

人生における青年期の重要性がピエトロ・ヴェッリの思想の中で既に認識されていたという事実については、「家族の精神」を扱った前節の中で指摘しておいたけれども、ここでは「拳の会」が発行していた「カップフェ」という雑誌<sup>(32)</sup>を手がかりにして、彼らが抱いていた青年や青年期に対するイメージを追求していくつもりである。

まず、ピエトロ・ヴェッリの弟であるアレッサンドロ・ヴェッリ (Alessandro Verri, 1741—1816) が書いた記事の内、第17号に掲載された「良い若者の教育のために良い人間によって書かれた警句」<sup>(33)</sup>と題された記事と、第32、33号に掲載された「社会的徳性」<sup>(34)</sup>と題された記事に表れた青年に関する記述について整理してみよう。アレッサンドロの見解によると、若者とは、たとえ学術的な知識があったとしても、世事に疎い「見習い生」、「情報をもたない外国人」であり、すぐに赤面してしまう「感受性の強い思想家」であり、豊かな想像力や陽気さ、時として抑制がきかなくなるほどの活力である「原始的な心」をもった存在であると考えられていたようである。そして、青年が実社会にでた際に直面することになる現実を、「馬鹿げた習慣が愛国精神という名で墮落した国民の間にはびこる」、欺瞞や不正が渦巻く世界としてとらえていて、特に、青年を取り巻く年長者たちを、これを無視、軽蔑し、彼らに不当な隷属を強要する存在、彼らを歓迎しない存在として描いている点が、当時アレッサンドロたちが抱いていた現実認識といったものを反映しているようで興味深い。ともかく、若者への教育的指導を目的に書かれたこれらの記事は、「人類の最も純粋で最も貴重な部分である」彼らが、細やかな情愛、正義感、高潔さ、実直

さ、素直さといった若者の長所により磨きをかけ、「冷徹な節制や臆病な抑制」に染まらないようにするために、様々な助言を与える、という形式になっている。また記事の中には、アレッサンドロが期待していた人物像、つまり若者が到達すべき理想の人間像が次のような言葉で語られている。

尊敬すべき人間は、年齢とともに人の世に関する合理的な認識を獲得することによって、一般的には経験というものが先入観や過ちを増加させるはずなのに、逆にこれを失う。こうした愛すべき人間は、戦争や平和といった様々な出来事の中でずたずたになった肉体の内に強力な理性を有し、あらゆる良い市民からの誠実な尊敬というものを期待している。こういった人間は、大抵の場合若者を愛するのである……。(35)

続いて、第28号に掲載されたピエトロ・ヴェッリの「有益な学問」<sup>(36)</sup>という記事を使って、青年期に対する認識状況を探ってみよう。弟アレッサンドロの記事と単純に比較すると、彼と同様に、青年とは「遅れてこの世に現れたよそ者」であるとか、勇気と活力を備えた誠実な存在といった認識があり、「拳の会」において青年に対する一致した見解が存在していた可能性を予測させる。ただ、こうした中で、「偏見に満ちた」年長者が先に生まれたという理由から青年に対する強力な支配権を所有しているという箇所に取り取れる、年長者、つまり父親の世代や旧制度に対する彼の痛烈な批判精神と明確な現実認識、自分たちがこの雑誌記事を通じて社会に役立つ人間を育成するという任務を引き受けることになるという喜びという二点が、極めて簡潔な表現を用いて述べられているあたりが、アレッサンドロには見られなかったピエトロの特徴として指摘できるような気がする。ここで注意しておくべきことは、「拳の会」の戦略の特徴として挙げられる、時に攻撃的ともいえる痛烈な旧制度批判や、それを通じて喚起されるべきである社会改革に関して自分たちがその先陣をきって指導していく責任があるといったような主張が、ピエトロ・ヴェッリのこの記事の中で明瞭簡潔に表明されている、という点である。こうしたことから、「怠惰と無気力」は恐るべき最大の欠点であると評した「行動の人」である彼が、

ミラノの啓蒙主義におけるリーダー的な役割を積極的に演じていた、という事実が裏づけられるように思われる。

最後に断片的な資料ではあるものの、ベッカリーアの「青年期について (Sulla gioventù, 1767-69?)」という文章をとりあげることになろう。<sup>(37)</sup> この短い文章の中で彼は、情熱、思考の柔軟性、豊かな感受性や吸収力を青年期の特徴であると指摘した上で、こうした美点が「無益な思想や頑固な習慣の塊」に覆われた現実の世界の中で、年齢を重ねるにつれて徐々に失われていくものだと考えていたようである。この断片が、生前公開されることのなかった個人的な記述であるという性格上、断定することは極めて困難であるが、少なくともこの文章を書いた当時のベッカリーアの興味が、ヴェッリ兄弟の文章に見られる青年指導やそれに付随する社会改革といったものから、人間性というものに対する内省的な考察<sup>(38)</sup>といったものに移って行ったことを示す、一つの証拠であるとは考えられないだろうか。

以上、ミラノの啓蒙主義における青年理解といった問題に関して、ヴェッリ兄弟とベッカリーアの例をとりあげて分析してきたわけであるが、総合すると次のことが指摘できそうである。まず、彼らは青年について、柔軟な思考、豊かな感受性、優れた吸収力、活力に満ちた未完成な「白紙状態」の人間という認識をもっていたということであり、次に、そうした認識から、自分たちが、積極的に指導力を発揮し、啓蒙活動<sup>(39)</sup>を行っていくことを通じて、この前途有望な存在を社会に有益な存在に育て上げようという、半ば使命感にも似た感情を抱いていたということである。更に、青年期がもつポジティブな特性が年齢を加えるにつれて失われるといった認識を、彼らの目に映った父親の世代のイメージに、若者に理解を示す理想的な人間像を彼ら自身と重ね合わせることによって、彼らが改革推進のための社会的なコンセンサスづくりを、青年教育を通して準備していたと想定することもできそうである。ただ、ここで注意しておきたいのは、彼らがこうしたメッセージを送った対象が、かなり限定されたものであった可能性が否定できないということである。これは、学問には各人それぞれの適性に応じたものがあるが、「俗人は」、学問が実は真実の発見と呼ばれ

る唯一のものしかないことを知らないと言った、ピエトロ・ヴェッリの論理展開の中に割合はっきりと見出すことができるが、アレサンドロの記事における、「才能と良識ある若者」といった記述や全体的な語り口<sup>(40)</sup>からも、おぼろげではあるが、こうした態度が顔を覗かせているようである。改革を通じて自由、平等、公正な社会を希求した彼らは、その一方で、人間の能力の不平等を肯定していたのだろうか。<sup>(41)</sup> ともかく、啓蒙主義が青年や青年時代に対する新しい理解を提起したという、本稿の最初のところで提示した前提を、ミラノにおいても確認することができた。彼らは、啓蒙主義という時代の流れの中でこうした認識を共有する一方で、自分たちの状況に合わせた独自の見解ももっていたようである。

#### Vむすびに

以上、極めて限られた資料を用いてではあったが、ミラノの啓蒙主義における家父長権を中心とした家族形態と青年理解に関して分析を加えた結果、主として英仏の思想を積極的に取り入れていた彼らの間に、家族形態に関して、何らかの変化を感じ、かつそれを望む声が芽生えつつあったことが確認されたように思われる。それでは、ヴェッリ兄弟やベッカリーアのこうした提言によって、何らかの変化が実際に生じたのであろうか。

1777年に出版された「家父長権についての倫理学的政治学的試論」と題された書物の、ピエトロ・ヴェッリに捧げられた献辞の中で、以前は「尊大で厳格」であった家父長権が「柔和で人間的」なものになったという証言が著者であるデ・カルリ（Andrea De Carli, 1751-1801）によって記されている。<sup>(42)</sup> 残念ながら、こうした家父長権の性格の変化を感じさせる表現が、何を根拠にしているのかといった具体的な証拠をここで提示することはできないけれども、彼が、ヴェッリたちと同じ啓蒙の時代を生き、同じミラノの知的エリート貴族層に属していたということを考慮すれば、この証言の価値をすべて否定することは難しいように思われる。

デ・カルリの著作には、家父長権と国家権力を比較することによって教

育に関する国家権力の介入を社会的な善として容認する結果的になる等、当時ロンバルディアの改革を行っていたハプスブルク家の政策を正当化しようとする意図が感じられるが、一方そのオーストリアにおいては、1768年頃から編纂作業が開始された「マリア・テレジア法典（Codex Thesarianus）」の中で、愛情をもって子供を養育すべしといったような、情緒的な側面が強調されていたり、この後1787年に公布されることになる「ヨーゼフ二世法典（Josephinisches Gesetzbuch）」では、子供の婚姻の自由が認められるなど、家族形態の変化を予感させる部分が挿入されているのである。<sup>(43)</sup> この内、後者に関しては啓蒙主義の影響があると考えられなくもないし、前者に関しては啓蒙主義の他に、ハプスブルク・ロートリンゲン家が時代を先取りする形で実現していた「市民的な性格をもった家庭生活」というものの影響<sup>(44)</sup>が、ある意味では反映されていたのかもしれない。ただここで念を押しておきたいのは、歴史家が、少なくとも「マリア・テレジア法典」に対しては啓蒙主義的というよりもむしろ伝統的といった評価<sup>(45)</sup>を下していることである。事実この法典は、先に述べた愛情という情緒的な面を強調しながらも、自然法によって与えられた家父長権だけでなく、市民法によって子供の人格、財産、行動に関する父親の権利を規定することによって、家父長に対する子供の絶対的な服従を再確認していたのである。<sup>(46)</sup>

それでは、実生活に関する部分では、何らかの変化が生じたのであろうか。この件については、資料不足ということもあってはっきりとしたことは分からない。ただ、象徴的と思われる事実を二つだけ指摘しておく。まず、ピエトロ・ヴェッリであるが、彼は暗い過去からの反省から、自分の娘に対しては「明るく自由に」育てようとする意志を覗かせる一方で、父親の死後遺産をめぐる長子相続権を主張し、アレッサンドロを含めた弟たちと争うことになる。<sup>(47)</sup> もう一つの例はベッカリーアであり、彼は自分自身が結婚問題で苦勞したにもかかわらず、娘ジューリアがピエトロ・ヴェッリの弟との結婚を望んでいたのに、財産保護という理由からこれを無視し、更にはピエトロ・ヴェッリと共謀して、ピエトロ・マンゾーニと無理矢理結婚させてしまうのである。<sup>(48)</sup>

家父長権の圧力に苦しみ、啓蒙主義を取り入れたラディカルな社会改革を望んでいた彼らが、実生活の中でこうした矛盾した行動をとっていたことが何を意味しているのかについては、甚だ疑問である。ただ、近世の家族構造が、一般に市民家庭が生まれるだけの諸条件を整えるだけの力が現実にはなかったために、16世紀から18世紀まで本質的には変化しておらず、封建時代末期の労働条件を背景に、依然として伝統的な形態の共同生活が支配的であったこと、著しい変化を期待するには、工業化と市民社会の形成が促進された19世紀まで待たなければならなかったということ、啓蒙主義影響が及ぼした、家族に対する新しい理解が、その理想が高邁なものただだけに人々をひきつけたけれども、啓蒙主義の洗礼を受けた一握りのエリート市民層の共感を得るにとどまっていたこと等の指摘<sup>(49)</sup>を考慮に入れると、彼らを取り巻く環境が、程度の差こそあれ、これと似たような状況にあったことが推測できそうである。

啓蒙主義、更には啓蒙絶対君主に社会改革の期待を寄せたミラノの若者たちは、理念上最大の矛盾点である啓蒙絶対主義を等閑に付したために、オーストリアの官僚として登用されたこの後、こうした矛盾点に対して何らかの現実的な態度決定<sup>(50)</sup>を迫られることになる。理論上は思想を自由に飛躍させるだけの余地を与えながらも、実際には、社会にそれを受け入れるだけの準備が整っていなかったために、伝統的な枠組みが根強く残った旧体制の中で、その理想の変更、挫折を余儀なくされたというのが、ミラノの啓蒙主義が遭遇した現実なのかもしれない。

#### 注解

- (1) 本稿におけるこうした問題提起に関しては、主にデュルメンの著作からヒントを得た。なお今回はこの著作の邦語版を参照した。

Dülmen, R. v.: Kultur und Alltag in der Frühen Neuzeit, Bd. 1, Beck, 1990.

R. v. デュルメン「近世の文化と日常生活1」佐藤正樹訳、鳥影社、1993年



- (2) ibd., pp. 7—10, 305—307
- (3) ibd., pp. 159—174
- (4) 歴史的背景に関しては、主として次の著作を参考にした。  
     Capra, C.: *La Lombardia austriaca nell'età delle riforme (1706—1796)*,  
     UTET, 1987  
     Carpanetto, D e Ricuperati, G: *L'Italia del settecento*, Laterz a, 1990  
     Venturi, F.: *Settecento riformatore*, Einaudi;  
         vol. 1, *Da Muratori a Beccaria*, 1969  
         vol. 5, *L'Italia dei lumi (1764—1790)*, tom. 1, 1987  
     Woolf, S.: *A history of Italy 1700—1860*, Methuen, 1979
- (5) Renzo Villata, G. di: *Il Governo della famiglia, Profili della patria potestà nella Lombardia dell'età delle riforme*  
     法制史的な理解を含めた当時の家父長権の状況に関しては、マリア・テ  
     レジアの没後200年を記念して刊行された論文集の第三巻に収められてい  
     るこの論文を参照した。以下、Villata と略す。  
     cf. *Economia, istituzioni e cultura in Lombardia nell'età di Maria Teresa*,  
     3 vol., Il Mulino, 1982
- (6) Villata, pp. 779—780  
     ピサ大学の教授であった L. A. Guadagni の説とされている。
- (7) ibd., pp. 780—781  
     バヴィーア大学の J. B. Noël de Saint Clair の見解。
- (8) Venturi, *Settecento riformatore*, vol. 1, pp. 659—675
- (9) ibd., pp. 675—677
- (10)それほど余裕の無かったベッカリーアの家の経済状況がこの結婚を歓迎  
     されざるものにしていた主要な理由であったという指摘が、最近の伝記的  
     な研究で明らかになっている。  
     Pongolini, F. P.: *Contribuito alla biografia di Cesare Beccaria, le vicende  
     economiche e patrimoniali della famiglia*, in *«Cesare Beccaria tra Milano  
     e l'Europa»*, Laterza, 1990
- (11) Beccaria, C.: *Opere*, cur. di S. Romagnoli, Sansoni, 1958, p. 836  
     1761年1月16日付、テレサ・ブラスコ宛の手紙。
- (12) ibd., pp. 837—838  
     1761年2月4日付、父親宛の手紙。上手く訳出することは出来なかったが、  
     (11)で引用した手紙や、結婚を諦めるといった内容の報告書や宣誓書と比  
     較すると、この手紙は、表現がかなり直接的で激しいものとなっている。
- (13) Villata, pp. 797—800
- (14) ibd., p. 794  
     併せて、(10)で紹介した論文も参照のこと。
- (15) 事実、ベッカリーアの結婚問題に関しても、彼の父親がミラノ政府に介  
     入を要求したのに対して、これを不満とするテレサ・ブラスコの父親がマ  
     リア・テレジア宛に嘆願書を出しており、こうしたことから、当時の複  
     雑な支配構造、権力構造といったものが推察される。  
     cf. Villata, p. 791
- (16) そもそもこうした協力関係は、「政治的理念の共通性」からではなく、

「共通の敵と戦うための戦略的、一時的」な必要性から結ばれたものであり、最初から矛盾をはらんだものであったことが、多くの研究者の一致した見解である。

cf. Capra, *La Lombardia austriaca...*, pp.216—217

Carpanetto e Ricuperati, *L'Italia del settecento*, pp.324—325

(17) Venturi, *Settecento riformatore*, vol.1, pp.659—747

(18) 1766年に「犯罪と刑罰」のフランス語版が出版された際、訳者であるモルレ (André Morellet) が、刑法改革のプロパガンダという性格を強調しようとする独自の意図から、ベッカリーアの承認を得ずに作品構成の全面的な改編を行ない、著者自身もこれに同調するような見解を公にしたことから、混乱が発生した。そして、1774年に42章構成のイタリア語版が出版されたり、ベッカリーア自身が自分の作品に対して次第に無関心になり、明確な発言を行なわなかったことが、事態をいっそう複雑なものにした。ちなみに、邦語訳である岩波文庫版の犯罪と刑罰は、42章構成の版を採用しており、1958年にヴェントゥーリが47章構成の方の価値を再評価するまで、どちらかという、42章構成のほうが一般的であった。

cf. C. ベッカリーア「犯罪と刑罰」風早八十二、風早二葉訳、岩波文庫

堀田誠三「ベッカリーアをめぐる文献敵諸問題」、『経済科学』28巻2号、pp.102—133、1981年

Venturi, *Settecento riformatore*, vol.5, tom.1, p.443

Edizione nazionale delle Opere di Cesare Beccaria, vol.1, Mediobanca, 1984, pp.304—322, 《NOTA AL TESTO》

(19) Edizione nazionale delle Opere di Cesare Beccaria, vol.1, pp.15—129

ibid., 327—335, 《CRITERI DI EDIZIONE》

(20) 「彼(ベッカリーア)は書き始める前にかなり長い間思考していた。二時間以上のこうした疲労に耐えられなくなると、ペンをとり、書き始めた。夕方になりピエトロが戻ると、ベッカリーアはそれまでに書き上げた部分を彼に見せ、彼の意見を取り入れながら変更や訂正を行なった……」(アレッサンドロ・ヴェッリの証言)

cf. Beccaria, C., *Dei delitti e delle pene*, con una raccolta di lettere e documenti relativi alla nascita dell'opera e alla sua fortuna nell'Europa del Settecento, cur. di F. Venturi, Einaudi, 1965, pp.113—126, 《COME NAQUE IL LIBRO》

(21) 島津英郷「ヴェッリ兄弟とベッカリーア」、『南欧文化』1号、2号、1974—1975

(22) 《Prima Redazione》と呼ばれる、現存する自筆原稿は、息子であるジュリオ・ベッカリーアがベッカリーアの原稿を編集、装丁したものである。

Edizione nazionale, vol.1, pp135—199, pp322—324

(23) ibid., 253—282

(24) ここでいうオリジナルとは、(22)で指摘したベッカリーアの自筆原稿のことである。

(25) Edizione nazionale, vol.1, p.166, pp.80—81

(26) ここで「家族の精神」に関するベッカリーアの認識のずれが指摘できる。最初のところでは、社会を、家族を構成する人間全てによって平等に組織

された結合体ではなく、家族の一部である家長だけによって組織された結合体と考えることが「家族の精神」であると規定しているのに対して、この文脈では、人間の心が公共の利益ではなく、利己的な利益に深く結びつくことが「家族の精神」であると考えているからである。ちなみにこの後半の部分は、比較の後になって付け加えられたものであることが、自筆原稿に関する研究から明らかになっている。

- (27) Edizione nazionale, vol.1, p.280
- (28) ibd., pp.80—83
- (29) ibd., p.81
- (30) 彼は、古代ローマの将軍、政治家であるスラの名を「拳の会」におけるペンネームとして使っていたことから、この部分が彼の筆によることが推測できそうである。
- (31) ibd. pp.280—281  
更に28章「死刑について (Della pena di morte)」の終わりに見られる、啓蒙絶対主義を賞賛する部分も、ベッカリアの自筆原稿には存在しないことから、この部分もビエトロ・ヴェッリのものである可能性が高いとされている。
- (32) これから検討する「カッフェ」の記事に関しては、比較的新しい下記の文献を用いた。  
《Il Caffè》1764—1766, cur. di G. Francioni e S. Romagnoli, Boringhieri, 1993
- (33) Verri, A.: Pensieri scritti da un buon uomo per istruzione di un buon giovine, ne 《Il Caffè》, pp.189—198
- (34) id.: La virtù sociale, Lettera di un institutore a Lucillo suo alunno, ne 《Il Caffè》, pp.739—746
- (35) 《Il Caffè》, p.195
- (36) Verri, P.: Gli studi utili, ne 《Il Caffè》, pp.311—318
- (37) Edizione nazionale delle Opere di Cesare Beccaria, vol.2, Mediobanca, 1984, p.310  
自筆原稿が失われてしまったこともあって執筆年代を特定することは難しい。
- (38) Venturi, Settecento riformatore, vol.1,731—732  
この時期、人間の内的な要素の分析を通じて人間性の本質を究明しようとする、彼自身が「人間学」と呼んだ研究に取り組んでいた。その結果が、「文体論 (Ricerche intorno alla natura dello stile, 1770)」と、未完に終わった「国民の洗練 (Ripulimento delle nazioni)」の断片であると考えられている。
- (39) こうしたことから、雑誌「カッフェ」の刊行は彼らにとって意味のあることであり、彼ら自身もまた、それをはっきりと認識していたようである。  
cf. Beccaria, C.: De' fogli periodici, ne 《Il Caffè》, pp.411—419
- (40) 「良い人間から良い若者……」といった題や、偽善的な哲学に反論するためにセネカが弟子に送った手紙の形式を踏まえているという点からも、少なくとも、読者にある一定以上の知的レベルを要求していたことが推測で

きる。

- (41) 少なくとも、彼らは民衆を自分たちとは違った存在であると考えていたようである。

堀田誠三「イタリア啓蒙思想のために」『社会思想史研究』、10号1986年、pp.92-103

- (42) Villata, p.771

- (43) 結局、「マリア・テレジア法典」は公布されることはなかった。

cf. Kocher, G.: Zum Wechselspiel von Rechtsordnung und Sozialordnung in der thesesianisch-josephinischen Gesetzgebung und Judikatur, 《Österreich im Europa der Aufklärung》, Bd.1, S.377-396, Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1985

- (44) A. ヴェントルツカ「ハプスブルク家」江村洋訳、谷沢書房、1987年 pp.183-197

cf. Maria Theresia, Briefe und Aktenstücke in Auswahl, hrg. v. F. Walter, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1968

- (45) 《Österreich im Europa der Aufklärung》, Bd.1, S.358

cf. Cavanna, A.: La codificazione del diritto nella Lombardia austriaca, 《Economia, istituzioni e cultura in Lombardia nell'età di Maria Teresa》, vol.3, pp.611-657

- (46) Villata, pp.783-787

- (47) ibd., pp.801-804

- (48) Pongolini, F.P.: Contribuito alla biografia di Cesare Beccaria, le vicende economiche e patrimoniali della famiglia, 《Cesare Beccaria tra Milano e l'Europa》, pp.614-618

- (49) デュルメン「近世の文化と日常生活1」, pp.318-324

- (50) ピエトロ・ヴェッリが、次第にオーストリアの政策に対して疑問を深めていくのに対して、ベッカリーアは、官吏としてのルーティーンな業務に埋没していくことになる。

cf. Venturi, Settecento riformatore, vol.5, tom.,1, pp.425-834